

親鸞聖人750回大遠忌



宿縁を慶ぶ

(ふじい くにもろ)
藤井 邦磨

七百回大遠忌法要

龍谷大学入学で、私は九州の田舎から初めて京都に行きました。父の指示で大谷本廟、次いで本願寺に参拝しました。大規模な両堂のすばらしさに驚いたことが、ついこの前の事のように思われます。一年後、七百回大遠忌法要が^{だいおんき}厳修^{ごんしゅう}され、私はアルバイトで参詣者の整理、誘導をしました。御影堂は毎座満堂。堂内に設置されたテレビによる法要の中継は目新しく記憶に残っています。(宗門でのテレビ放映は、この時が初めてだと思います)。

敗戦の余韻^{よいん}がまだ少し残っていた時代です(龍谷大学が七百回大遠忌法要の記念事業として深草の米軍キャンプ跡地を取得して深草学舎を開学。鉄条網で囲まれた校内であり、私たちはその一期生)。豊かさを実感できない時代であるにもかかわらず、全国からの参詣者で埋めつくされた本願寺境内。ひとえに親鸞聖人のご恩徳に報謝する感動の光景でした。

門信徒会運動

当時、社会の激しい変化(政治面では日米安保条約改定問題、宗教界では新宗教の^{いちじろ}著しい台頭など)の中で、この盛儀を単なる法要だけに終わらせてはいけないという危機感が宗門内から起り、大遠忌法要の翌年「門信徒会運動」が提唱されました(一九六二年)。

小学生時代から病床にあった父(住職)が在学中に亡くなり、卒業と同時に帰郷して住職を継職。約十年間“住職不在、状況の寺は荒れ、参詣者は激減し、新宗教に走る門徒も出る始末。途方に暮れる私に「あなたの寺を強くせよ」というスローガンが耳目に入ってきました。先輩を^{たまわ}尋ね、お育てを賜った私は、やがて「連研」という場に行きつきました。話し合いを中心とした本堂内は、これまでの^{ふんいき}雰囲気とは変わりました。次いで「中央教修」と関わるご縁をいただきました。その間、「門信徒会運動」は「^{どうぼう}同朋運動」と一本化され「基幹運動」となりました(一九八五年)。

組連研を修了された門信徒が大谷本廟の研修道場や門法会館^{もんぼう}に、全国から参集されました。三泊四日の中央教修は私の人生にとって貴重な学びの場となり、ある時は火花が散る程の討議、ある時は涙とともに夜を徹して語り合ったこともありました。

本願寺教団^{かか}の抱える問題点、僧侶の意識、門徒の悩み、そして私自身の不勉強等々の課題が明らかになりました。同時に多くの人々との出遇い^{であ}は、生涯のありがたい出遇いとなりました。

お念仏の輪

中央教修を終え、門徒推進員となった人たちは、自主的に同窓会を持っています。今年はその内、七十六回生の鹿児島大会に出席することができました。この会は、二十年前に修了された方々の集い^{つど}です。会員本人が亡くなくても、家族がその遺志を継いで参加されたり、連れあいの方と一緒に参加されることもあります。もちろん地元の門信徒も交えての集会でした。自らの手で企画・運営していく動きは従来の僧侶中心・主導の宗門から新たな展開が見られ、徐々に新しい流れとなっていく可能性を肌感じます。

御同朋の世界

承元^{じょうげん}の法難（一二〇七年）により越後^{えちご}にご流罪^{るざい}になられた親鸞聖人は、

もしわれ配所^{はいしょ}におもむかずんば、なにによりてか辺鄙^{へんび}の群類^{ぐんるい}を化せん。これなほ師教^{しきょう}の恩致^{おんち}なり。（『註釈版聖典』一〇四五頁）

と受けとめられ、関東時代には気色^{けしき}ばむ明法房^{みょうほうぼう}に対して、

上人^{しょうにん}左右^{さう}なく出^いであひたまひけり。（『同』一〇五五頁）

と接せられました。また、唯円房^{ゆいえんぼう}の疑問の場面では、

親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。（『同』八三六頁）

と立場の隔てなく寄り添われる親鸞聖人でした。「愚禿^{ぐとく}」と名のられ「弟子一人ももたず」と宣言され、

一切^{うじょう}の有情はみなもって世々^{せせ}生々^{しょうじょう}の父母^{ぶも}・兄弟^{きょうだい}なり」（『同』八三四頁）

の視点に立てば、無関係な存在（いのち）は一つもないという、温かい心が通い合い支え合う世界です。

七百五十回大遠忌法要

十年に及ぶ御影堂修復工事の様子が折々にテレビ放映され、『宗報』にも長期にわたり詳しく連載されました。われわれのご先祖が親鸞聖人の御真影さまをご安置するお堂に対して、いかに篤い思いを抱いていたのかを改めて認識させられました。

今年の四月二日、御影堂平成大修復完成奉告法要が厳修され、その時に発布された「ご消息」にご門主さまは、御影堂は「宗門の要」とお示しく下さいました。まさに目から鱗が落ちた思いでした。その御影堂で、七百五十回大遠忌法要が厳修されます。五十年に一度のご勝縁です。

一宗の繁昌と申すは、人のおほくあつまり、威のおほきなることにてはなく候ふ。

一人なりとも、人の信をとるが、一宗の繁昌に候ふ。（『同』一二七一頁）

との蓮如上人のご指南を胸に刻みながら、

お念仏の人生とは、阿弥陀如来の智慧と慈悲とに照らされ包まれ、いのちあるものが

敬い合い支え合って、往生浄土の道を歩むことでもあります。如来の智慧によって、争いの原因が人間の自己中心性にあることに気付かされ、心豊かに生きることのできる世の中、平和な世界を築くために貢献したいと思います。（親鸞聖人七百五十回大遠忌法要についての消息）

とお示し下された、ご門主さまのお心を門信徒と共有したいものです。

来る十月十二日より十六日まで、大谷本廟にて、親鸞聖人七百五十回大遠忌法要がお勤まりになります。生涯二回目の大遠忌法要のご縁を心待ちにするとともに、貴重な学びの道場であった大谷本廟に、このたび、参拝できますことは、感慨一人であります。

（本願寺派布教使）